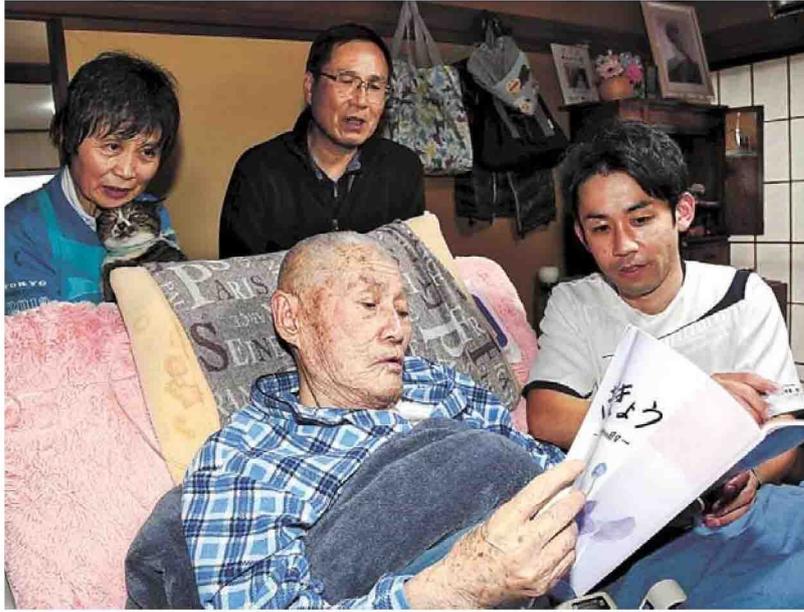




## 箕輪の内山富次さん体験 長男夫婦自費出版

旧満州(現中国東北部)で終戦を迎えた箕輪町中箕輪の内山富次さん(92)の体験を、長男夫婦の政則さん(71)と敬子さん(67)が冊子「ききょう 父の満州での日々」にまとめ、自費出版した。終戦直後の家族との別れや困窮を振り返った。内山さんのリハビリを担当した上伊那医療生協(箕輪町)の作業療法士、有賀康大さん(33)が聞き取りで協力。夫妻はロシアがウクライナに侵攻する今こそ「戦争がもたらす悲惨さを知ってほしい」と願っている。

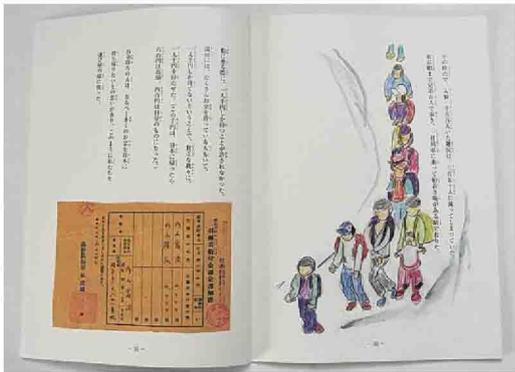


内山さん(手前)の体験を聞き取った有賀さん(右)と、長男夫婦の政則さん(中央奥)敬子さん

## 死別と困窮 父の旧満州

岡谷市生まれの内山さんは12歳だった1942(昭和17)年3月、孫船八ヶ岳開拓団に加わり、父、母、姉、兄、弟2人、妹と満州に渡った。しかし3年余り後の終戦で家族は混乱の渦中に。45年9月に逃避行の末に入った難民収容所では、父母を栄養失調で、現地で生まれた3歳の妹と0歳の弟も病气などで亡くした。現地で召集された兄は、軍隊から集落に戻る途中で亡くなった。

冊子は収容所の様子も鮮明に描写している。食料は満足になく、茶わん1杯の馬の飼料にトウモロコシの汁をかけて食べた。収容所内で死体を運ぶ業務に携わったが凍土は硬くて掘れず、雪をかけるしかなかった。こうした場面は、敬子さんが色鉛筆や水彩で想像



挿絵や資料写真も盛り込んだ冊子

## リハビリ担当有賀さん協力「戦争がもたらす悲惨さ知って」

して挿絵を描いた。

内山さんは46年8月に岡谷市に引き揚げ、トラック運転手などをして弟や妹を養った。満州で十分な教育を受けられず、日本での就職は苦勞も多かった。内山さんは「惨めな思いをした戦争はしたくない」と力を込める。

ベッド生活を余儀なくされ、字が書けなくなった内山さんの体験を文章に残す提案をしたのは有賀さんだ。内山さんは入院時のリハビリ担当だった有賀さんに3年ほど前から記憶を話すようになっていた。有賀さんは「形に残すことはご自身にも大きな価値がある」と文章化を持ちかけた。

40分ほどのリハビリの時間に話を聞き、パソコンで書いた文章を見せて内容を擦り合わせた。内山さんは最初は前向きでなかったが、次第に「この話は違う」と話すなど意欲的になったという。

B5判、54ページ。タイトルには入植地に咲いていた花と「帰郷」を重ねた。300部を作り、親戚や内山さんの介護に関わる人に配布。今後は上伊那地域の学校や図書館に寄贈する意向だ。

内山さんは「生きるのに精いっぱいだった」と体験の多くを人に話してこなかった。敬子さんは「子どもたちも体験を知って、気持ちを向けてほしい」。政則さんも「戦争を身近な問題として考える入り口になればいい」と期待している。問い合わせは政則さん(09060・89400・26957)へ。

## 死別と困窮 父の旧満州

### 解答例

年 組 番 名前

旧満州（現中国東北部）で終戦を迎えた箕輪町の内山富次さんの体験を、長男夫婦が冊子「ききょう 父の満州での日々」にまとめ、自費出版しました。冊子には、内山さんのどんな体験が記されているのか。記事を読んでみましょう。

①内山富次さんは、何年に旧満州に渡りましたか。内山さんの家族は終戦後、現地でどうなりましたか。

【解答】 1942（昭和17）年

45年9月に逃避行の末に入った難民収容所では、父母を栄養失調で、現地で生まれた3歳の妹と0歳の弟も病気などで亡くした。現地で召集された兄は、軍隊から集落に戻る途中で亡くなった

②冊子は収容所の様子を、具体的にどう描写していますか。二つ書きましょう。

【解答】 食料は満足になく、茶わん1杯の馬の飼料にトウモロコシの汁をかけて食べた  
死体を運ぶ業務に携わったが、凍土は硬くて掘れず、雪をかけるしかなかった

③内山さんは、冊子の編集で内容を擦り合わせる中、どうなったといいますか。

【解答】 次第に「ここの話は違う」と話すなど意欲的になった

④長男の政則さんは、冊子に対して何と期待していますか。

【解答】 戦争を身近な問題として考える入り口になればいい

⑤あなたの住んでいる地域で、旧満州に渡ったり太平洋戦争を体験したりした人の話を聞き、体験談なども読んでみましょう。また、それを基に、これからの社会について、考えてみましょう。

【解答】 略